

平成二十三年度 中学校第一回入学考査問題 (国語)

(その一)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること。また、字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

東京の名門進学校に通う中学二年生の高見陽介は、父親の犯罪のため家族がバラバラになり、母の姉の後藤恵子に預けられ、学校も転校した。恵子は、北海道で鮎鱒舎という児童養護施設を経営しており、そこでは陽介の一番の友人となった卓也など十四人の中学生が暮らしていた。

「見せて見せて、本当に百点なの」

開聖では、お互いの答案を見せ合うことなど絶対にありえなかった。それがまだ授業中だというのに男子も女子もつぎつぎにおれの机にやってきて、満点の答案用紙を見物していく。二時間目の理科、三時間目の技術家庭と音楽でも同じ光景がくりかえされて、四時間目の社会ではみんなも驚き疲れたようだった。

おれは吉見がよく耐えていると思っていたが、すでに我慢も限界に来ていたのだろう。

五時間目に英語のテストが返されたあと、「最高点は百点が四人」と教師が言ったのに対し、「さすがは吉見君」と大竹がお愛想をかぶせた。

「うるせえなあ。おれはちがうよ」

日頃の穏やかさとはかけ離れた口調に、教室中がしんとまった。答え合わせが進んでいくあいだも、吉見は腕を組んだまままだだった。六時間目は数学なのだから、さらにグメを押されることを考えて、やりきれない思っているのだろう。まさかなくさめるわけにもいかず、おれは英語の答案を机に広げたまま、見たいヤツらに見せておいた。

「これで六百点でしょ。つぎの数学が満点だったら七百点だよ。ちよつと、どうしよう」

「ばーか、おまえになんか関係ないよ」群がる女子たちを押しつけて、卓也がおれの机に片手をのせた。

「鮎鱒舎・イズ・ナンバーワン、つとところかな。おばさんが喜ぶぜ」

「そうでもないだろ」と答えながらも、おれは父と母に早くこの結果を知らせてやりたかった。おれはこうしてがんばっているのだから、とうさんもかあさんも負けないで。

カンシヨウにひたっていたせいで、「えー、本当に。高見君って開聖学園だったの？ 東京の？」という言葉が耳に入ってきたとき、おれは誰が何を言っているのか、すぐにはわからなかった。

「そんなヤツが、どうして鮎鱒舎なんかにいるんだと思う？ 理由を聞いたら驚くよ」

黒板の横では、吉見と大竹が肩を寄せあい、クラスの女子たちにおれの父親が逮捕された経緯を話した。いったいどうして知られてしまったのか。そう思うなり胸が締めつけられて、反対に頭は悲しさでふくれあがったようになり、おれは唇を薄く開いたまま卓也を見あげた。

「おい、黙れ！」

怒鳴り声とともに、卓也が突進した。逃げ遅れた女子をはじき飛ばし、両腕で二人の首を抱えると、大竹を投げ倒してから、左手で吉見の首元をねじりあげた。

「おい、その話を誰に聞いた」

「は、放せよ」

「放したら言うのか」

卓也が苦しげにうなづく吉見を黒板に押しつけているとき、騒ぎを聞きつけた教師たちが教室に入ってきた。

午後八時半に始まった話し合いは、十時前になっても終わる気配がなかった。栄北中学からは校長と教頭と山野先生、吉見と大竹とそれぞれの両親、そして恵子おばさんに卓也とおれという総勢十二名は、栄北中学の会議室で楕円形のテーブルを囲んでいた。

話し合いの冒頭、おれが鮎鱒舎で暮らすことになった事情がなぜほかの生徒にもれたのか、教頭によって説明された。

それによると、水曜日のレクリエーションで卓也のスパイクに直撃された大竹は、「鮎鱒舎の二人組」がコイに自分を狙ったと訴えた。そのため放課後に保護者をよんでの話し合いでは、おれたちが大竹を狙ったのか、狙っていないのか、問題になった。証拠はないのだから水かけ論になるしかないが、恵子おばさんが帰ったあとに、「その二人は、いったいどういう子たちなんですか？」と大竹の父親がたずねて、とにかくその場を收拾したいと願う山野先生が、おれたちが鮎鱒舎にあずけられるにいたった事情を話してしまっただけという。

それだけでも大変な失態だが、大竹の父親は家に帰ってから息子にそのままを伝え、今後あの二人には関わるなと釘を刺した。そして大竹は、期末テストでおれに負けたと落胆する吉見をなぐさめようと、日曜日に自分の父親から聞いた内容を教えた。

以上の経過は、山野先生の謝罪と、スクールカウンセラーによる大竹と吉見への個別面談によってあきらかにされた。事情を知った校長と教頭は事の重大さに驚き、恵子おばさんに一連の経過を伝える一方、教育委員会とも連絡を取り合った結果、当事者である生徒たちと保護者をまじえての話し合いがもたれることになったのである。

八時半には全員が集めたものの、話し合いはすぐには始まらなかった。それというのも大竹の父親が息子の同席を拒んだからで、そのためにまずは生徒たちを参加させるかどうかを巡り、大人たちによる事前の話し合いがおこなわれた。

おれたちが会議室によられたとき、時刻はすでに午後九時半を過ぎていた。校長によると、こうした場に生徒を参加させるのは異例だが、今回はきみたちの気持ちの強さを信じて特別に判断したという。もともと大竹の父親はどうい納得できないという態度をあらわにして、校長にうながされてしぶしぶ立ちあがり、それが会釈のつもりなのか、頭をほんのわずかに揺らせた。

「まず申し上げなければならぬのは、今回の件はわれわれ栄北中学に責任があるということです。生徒の個人情報、それも児童養護施設で暮らす本校の生徒たちがいかなる事情によって親元を離れているのかといった内容を外部にもらすなどということは決してあってはなりません……」

担任教師個人の失態ではなく、**カンリ職**を含めた教職員集団全体の問題だと受けとめているという校長の発言につづいて、恵子おばさんが立ちあがった。

「先生や保護者の方々にはくりかえしになりますけど、あたしが言いたいのは、悪いのはその子たちじゃないってこと。もちろん、うちの子たちでもない。いくら勉強ができたって、精神的にも肉体的にも**ミジユク**な中学生によけいな情報を教えた大竹君の親と、そのきつかけを作った担任の山野先生が絶対にもちがっているわけだよ」

「本当に申し訳ありませんでした」と山野先生が両手をテーブルについて頭をさげた。

²「悪いんだけど、あたしはそんなふうに謝られるのがすきじゃないんだわ」と言つて、恵子おばさんは大竹の父親に目をむけた。

「そちらは、今でも謝る必要なんてないと思つてますよね」

³凶星を指されて、大竹の父親は怒りで顔を真っ赤にした。

「あたしが一番怖いと思つているのは、大人の偏見で子供同士の関係がゆがめられることなんです。ここにいる二人は親と暮らせず、うちの施設でめんどうを見ています。そこにはたしかに理由がある。でもね、大人なら誰だって、表沙汰にはしたくない秘密のひとつや二つは抱えているんじゃないやありませんか。うちの子たちの場合は、親の対処がへたくそで、家庭を壊しちゃったわけだけど、そのつたなさをあげつらつたって、誰にもひとつもいいことはありませんよね」

「よろしいでしょうか」と言つて手をあげたのは、吉見の父親だった。頭が白髪まじりなところを除けば吉見と瓜二つで、こんな場でも自制心を保っていられる様子からして、かなり優れた人なのだろう。

「皆さんの前で言うことでもありませんが、わたしは自分の息子を心底情けなく思つています。実は、これまで一度として、一樹を叩いたことがありません。しかし今は、実際にできるかどうかはともかく、本気で息子を打ち据えたいと思つています。おそろく妻もそうでしょう」

そこで吉見の父親は目を伏せて、こらえかねた怒りを散らすようにからだを震わせた。

「もつとも、わたしが息子と完全に同じ立場におかれたとしたら、同じように愚かな行動に出ていたかもしれないと思つています。その意味で、後藤さんが言われたことは全く正しいと思います」

それから吉見の父親は卓也とおれにむかつて謝罪をし、まことに失礼だがと断つてから、きみたちはお互いがどうして施設にいるのかを知っていますか、とたずねた。

「知りません」とおれが言うと、吉見の父親はつらそうに目をつむつた。

⁴「ぼくは、陽介が開聖学園の出身で、親父さんがなにかしらしいということまでは知っています。でも、それ以上は気にしてもしかたがないし……」

「うそをつくんじゃない」と言つて、大竹の父親がテーブルを叩いた。「気にならないわけがないだろう」

「大竹さん」校長は椅子から立ちあがると、**コウフン**した相手の前に進み出た。

「懺悔④かもしれません、わたしはあなたの気持ちが変わりますよ。立場上、生徒に関する事情を知つてしまつと、この子はこんな苦しみのなかで育ってきたのかとか、この子の親はなんてこらえしようのない人間なのかといった偏見がどうしたって生まれますからね。そして、つい生徒自身までがだらしがないように思つてしまふ。でも、そんなときは生徒同士につきあいに学ぶんです。正直に言えば、鮎鱒舎の生徒へのいじめはあります。ただし全員がいじめられているわけじゃない。なかにはごく普通につきあえている子たちもいて、わたしはつくづく感心するんです」

校長の話はさらにつづいたが、大竹の父親はそれでも納得できないようだった。あまり上等とはいえない背広を着て、太り気味の顔で荒い息をはく夫の横では、髪の毛の薄さが目立つ妻がゆがんだ顔をうつむかせていて、おれはしだいに大竹のことが気の毒に思えてきた。

校長は、自分自身にも戸惑いがあったため、教師たちへの指導も不十分になってしまい、それが結果的に今回の事態を招いてしまったと考えていると話をまとめ、最後に深く頭をさげた。

「わかりましたよ。たしかにわたしが悪いんでしょう」

そう切り出すと、大竹の父親は両手をテーブルについて立ちあがった。

「こうなった以上、息子は転校させます。どこか近くの中学校を紹介してください。親子そろってここまで恥をかかされたんじゃあ、とても栄北中にはいられませんからね。そうでしょう、吉見さん」

土壇場に來ても道づれをつくろうとする強引さに、おれはことばもなかった。吉見の父親も困惑した顔を校長にむけている。

「親の都合で、なにを勝手に決めてんだい」恵子おばさんの声が響き、会議室の空気が一変した。

「まったく、なんのためにこの子たちを参加させたと思ってるのさ。吉見君、あんた、よその学校に転校して、そこで一番になりたいかい。それとも、今回こてんこてんに負けた陽介と一緒に勉強して、二人でもっと上を目指したいかい。自分とこの子を自慢するのは気がひけるけど、北海道中を探したって、ここまでできる中学生はそうはいないよ」

恵子おばさんのことばを受けて、吉見が父親と目を合わせた。そしてお互いうなずくと、吉見は背筋を伸ばした。

「高見くん、悪かった。ごめん」

「おう、気にするなよ」

「よし、そうこなくちゃね。さあ、大竹君。吉見君は栄北中に残るってさ。きみだって、いつか卓也の顔にスパイクを叩きつけてやりな」

「そんな、なにを言ってるんだ」劣勢を悟った大竹の父親があえぐようにつぶやいた。

「大竹さん。あんた、今ここで、うちの二人がどうして施設に入ることになったかを言っごらん。なんなら山野先生と二人でもいいからさ。先生も、大竹さんと一緒に、担任をはずしてくれて校長さんに頼んだそうだけど、生徒たちが学校に残るって言うてるのに、そんな勝手は許さないからね」

おばさんは一気に入たみかけると、これで文句はないだろうというように顎をつき出し、平たい胸を張ってみせた。

「大竹さん。それから息子さんも……」と吉見の父親が言いかけて、「徹だよ」と吉見が耳打ちした。「そう、徹君も。うちの一樹がふがないばかりにご心配をおかけしたのがなにもかもの発端なわけで、どうかわたしに免じて許してやってください」

そう言っ頭をさげると、吉見の父親はおれたちにもていねいに頭をさげた。

二組の親子が先に帰り、山野先生も教頭と一緒に校内の見まわりに行つたので、会議室には卓也とおれ、恵子おばさんと校長先生の四人になった。

「本当に申し訳なかったね」と言うと、校長はあらためておれたちに頭をさげた。 (佐川光晴「おれのおばさん」)

⑤ スパイク・・・バレーボールで、相手方にボールを強く打ち込むこと。 僭越・・・立場をこえて出過ぎたことをすること。

問一 線部 a e のカタカナを漢字に直さない。

問二 線部 ①②③の本文中のことばの意味として適当なものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

①水かけ論

ア 相手の欠点を指摘し合う議論

イ 決着のつかない議論

ウ 相手の立場を無視した議論

エ しても仕方のない議論

②釘を刺した

ア 相手の弱みにつけこんだ

イ 自分の意見に従うようにおどした

ウ 相手に対して無理矢理同意を求めた

エ 先々のことを考えて念を押した

③凶星を指されて

ア 言いたいことを先に言われて

イ 欠点を指摘されて

ウ 本音を言い当てられて

エ すっかり悪者にされて

問三 線部 1「六時間目は数学なのだからやりきれない思いでいるのだろう」とあることから分かるように、陽介は相手の立場にたつて気持ちをおしはかることのできる人物として描かれている。陽介のそのような性格がはっきり分かる表現がこれ以降にも一カ所ある。その表現が含まれる一文を探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問四 線部 2「悪いんだけど、あたしはそんなふうに謝られるのがすきじゃないんだわ」とあるが、この時の恵子おばさんは何を期待していたのか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 形式的な謝罪ではなく、当事者の子供たちが互いに理解し合って成長していけるようにしてほしい。

イ 山野先生の過失は明白だが、教職員の指導が不十分であった校長がまず第一に頭を下げてほしい。

ウ 山野先生が謝罪するだけでなく、まったく謝罪の意思のない大竹君の父親にも謝罪してほしい。

エ 大人たちが謝罪しても、きずついてしまった子供たちの心は簡単には治らないことを知ってほしい。

問五 — 線部3 「吉見の父親はつらそうに目をつむった」とあるが、それはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 陽介と卓也は仲が良くても、たがいに自分の経歴をこだわりなく話せないという境遇をあわれに思ったから。
- イ 陽介のことを、父親の事件とは切り離さずに偏見の目で見てしまったことを恥ずかしいことだと思ったから。
- ウ 大人の不注意から知らなくても良い情報を知り、卓也と陽介の友情にひびが入るのでと申し訳なく思ったから。
- エ 息子を、他人の心の痛みを理解できない、偏見で人を見る子供に育ててしまったことをくやししく思ったから。

問六 — 線部4 「それ以上は気にしてもしかたがないし……」とあるが、このときの卓也の心情はどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の施設での生活は決して愉快なものではなく、陽介との友情が大きな救いであり、これを守るためには、今の状態を黙って受け入れるよりしかたがないのだという気持ち。
- イ 卓也と陽介との友情は二人の交流によって築かれたものであり、家族のことや、この施設へやって来る前の生活などは知る必要はないという気持ち。
- ウ 自分は悲しい出来事を経験してこの施設で生活することになったので、陽介も同じだろうと思うとそれを思い出させるような話題は避けるべきだという気持ち。
- エ 陽介との友情は施設に来てからのものであり、陽介のそれ以前の生活を知ろうとすることは逆に自分の境遇を告白することに成り、それはたまらなくいやだという気持ち。

問七 — 線部5 「吉見が父親と吉見は背筋を伸ばした」とあるが、この時の吉見の気持ちを六〇字以上、七〇字以内で書きなさい。

問八 — 線部6 「勝手は許さないからね」とあるが、「おばさん」が山野先生を「勝手」と非難したのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア せっかく仲直りした生徒たちの気持ちを確かめることもしないで、自分の思いだけで担任をやめようとするのは、生徒たちの気持ちを踏みにじる結果になるから。
- イ 担任をやめることは山野先生本人の気持ちとしてはけじめとなるだろうが、生徒たちにとってみればわけも分からず取り残されてしまったような気持ちになるから。
- ウ 人生には失敗はつきもので、失敗のたびにこんな申し出をしていたら何も成し遂げることができないし、教師として生徒の手本にもならないから。
- エ 担任をやめることは責任をとることのように見えるが、生徒たちが仲直りした以上、つらくても生徒たちの成長を手助けすることが本当の責任の取り方だから。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人間が、外界を制御しその成果を自らに取り込むことは、一つに、「人間的」なこととして肯定される。他方で「自然」はそうなっているとされる。(中略)

動物とかみんなそうしているではないか。自分の餌は自分でとってきていると、この世界は弱肉強食の世界である、厳しい世界なのである。そう言われる。他に言うことはないのかと思うのだが、こんなことがよく言われる。そして、NHKであれ民放であれ、昔から親たちに評判のよい動物番組などでは、そういうナレーションが入るわけで、なるほど動物もなかなか大変だと思う。「だからあなたもがんばりなさい」、などと子どもに言う単純素朴な親がどれほどいるのかわからないけれど、しかし流れとしては、そのようなつながりになる。動物全般が〇〇していることがわかったとする。人間は動物の一部分だ。だから、人間も〇〇した方がよい。こういうお話である。

しかしそれはおかしい。そう思うでしょう。それをどう言うか。一つは、なにかの事実からどうしたらよいかは直接に出てこない、と言うことだ。動物が殺しあっているという事実があるとして——同じ種で大々的に殺しあっているのは人間ぐらゐのものだが——、それがよいことだとはならない。「…である」ことと「…すべき」こととは違う、というのは論理の基本で、当たり前のことで、たしかにそのとおりではある。

もう一つ、全体の中で自分たちを除いた部分がこれこれであるとしても、自分たちがこれこれでないことはある。そして、全体の中で自分たちを除いた部分がこれこれであるべきだとしても、自分たちもこれこれであるべきだとはならない。あくまで、全体(たとえば動物全体)がこうだと、あるいはこうであるべきだと言えた上で、人間も、その全体の一部であるから、こうだと、あるいはこうであるべきだと言える。

たとえば、よいたとえではないのだが、人間を全体として、その一部(半分ほど)である女がこうだからといって、残りの一部(半分ほど)である男もこうであるとは言えない。女がこうあるべきだからといって、男もこうあるべきだとは言えない。人間全体がこうあるべきだと言って、その一部である男も、当然、こうあるべきだと言える。難しいことではない。当たり前のことだ。

以上で終わり。動物はこうしている(自然ではこうなっている)、人間も動物の(自然の)一部である、だから人間もこうすべきだ、という話には、いまの二種類の混同が両方とも含まれていることがわかるだろう。繰り返すと、一つ、現実がそうだからといって、そうしなければならぬわけではない。もう一つ、隣がそうだからといって、自分もそうしなければならぬわけではない。(中略)

たぶん、人間も動物だから〇〇すべき、と言う人は、〇〇すべきを、なにか道徳原理のようなものとしてはあまり考えていないと思う。動物はそんなでやってきた。続いていた。それで今までやってこれた以上、これからもやっていくには、動物の一員である人間もそれは否定できないのではないか。こんな具合に思っているのかもしれない。あるいは否定しようとしても、動物としての本能があつて、それはなくせないのだから、それを認める方向でやっていくしかないのだ、その方がうまくいくのだと思つているのかもしれない。

こんなふうに言われたらどう答えようか。まじめにやっているとこれはとても長い話になると思う。短くしよう。

まず、すこし別口の話から。こういう話つて、ゲーヴィンがガラパゴス島でどうか、DNAがどうかとかいう「新発見」とつなげて言われることがよくある。

A これはすこし不思議な気がする。たしかに、人間が自然界でなにか新しいことを発見するということはある。

B それはよいことだ。顕微鏡でも天体望遠鏡でもなんでもよいのだが、何かを使つてあるいは使わないうで発見された新事実があるとしよう。

C 大規模な実験や複雑な計算・演算によつて明らかになった人間や世界のメカニズムがあるとしよう。

A、それらが新たに知られたことで、人間はどうしたらよいのかというようなことがはじめてわかるようになるのだろうか。あるとしたら、それ以前の人はそれを知らないということになる。

C

B

、その発見のことを知らない世界の人たちは、今でもそれを知らないということになるはずだが、いったいそんなことがあるのだろうか。ないように思える。新しい技術やなにかは、いろいろと厄介な問題を起こすことはあつても、その答を新しく示すことは思えないのだ。

次。新たに発見されたと言われることにせよ、前から人が思つていふことにせよ、自然界ではしかじかというのは、ほんとうのことではないかもしれない。自然界の動物たちは朝から晩まで働いている、生存競争してるといったイメージがあるのだが、たとえば、働き者の代表のように言われる蟻が、じつはけっこうさぼつてるといった話がある。さぼつてい

るのは適切なのではないだろうが、ともかく生存のための食料獲得活動のために最大限有意義な活動を常に行っているように見えるのは蟻がたくさんいるのだそうだ。そうかもしれない。私たちがけっこう見たいことを見ることにしているところがある。人の世が騒がしくなると、動物たちの世界も騒がしく見えるというように。人間が生存のために闘い、負けると淘汰されるという世の中にいたから、生存競争だの適者生存だのいった言葉が現われ、そしてあつというまに流行したのではないか。だから、確かでないことは確かでない、わからないことはわからないと思つた方がよいし、言つた方がよい。

「次。人と人でない生物と、やはり暮らし方・暮らし向きはずいぶん違う。すくなくともものの扱いについて、人間は明らかに他の生物と別のことをしている。自分が生きていく分より、また場合によつたら子とかその仲間とかが生きていく分より、ずっと多くを得ようとする。そして実際に得ることができている。そんな動物はいないと思う。人間だつて、ちょうど一人ひとりがちょうど自分の分を食べているのなら、それはそれでおしまいであつて、加えてあまり言うことはない。しかし実際には人間は違う。ずっとよけいなものを持って、一人で抱えこんだりする。であるのに、それと違う生活をしている動物をもつてきてもらつても困る。また、たぶん、小さい魚が大きな魚に食われるときの気分と、人が殺されるときの気分というのはやはり、たぶん、かなり違うものはずだ。」

そして、今述べたことの一部でもあるが、人間はただの動物でないとか言いながら、人工物を作りそれに囲まれて生きていながら、つごうのよいところで動物をもつてきたり、自然をもつてきたりというのはなにかずるくはないだろうか。突然変なことを言うようだが、私はこのごろ「自然な死」とかすぐ言う人たちが怪しいと思つている。すこし怒つてもいる。その人たちもふだんはぜんぜん自然になんか生きていない。冷蔵庫を使つたりしている。ところが病気で息が苦しくなつて、人工呼吸器というものがいるようになる、そんなものをつけずに自然に死なせてやれとか言うのである。人工呼吸器つて、扇風機、とかか換気扇のようなものだ。クーラーよりも原理は原始的なものだ。なのに一方は使い、他方は使わないう。辻褄が合つていない。そうすると、早目に死んでほしいと思つたときに、「自然に」とか私たちは言つてしまつてはいないかとも思えてくる。

最後。そうやつて違つていふ人間だけでも、その違つるところも含めて、人間や人間のあり方は常に自然の中にあるとも言える。私たちは、自然の中にないものを使わないうでどんなものも作ることにはできない。そして人間は進化したのかしなないのかそれは知らないけれども、ともかく他とは変わつて、なにか変なことができるようになったりしたが、それもまた自然界の変化の中にある。人によつてはそれを進化の結果だと言いたいのだろうか、言つてもらつてもよい。すると、人間という自然によつて手を加えられた自然物、人工物が、他のものよりよくない理由はすぐには見つからないはずだ。

(立岩真也「人間の条件 そんなものなら」)

⑧ 演算・・・答えを求める数学的な操作。

淘汰・・・生存競争の結果、環境に適応できないものが滅びること。

辻褄・・・ものごとの始めと終わり。

問一——線部1「しかしそれはおかしい」とあるが、なぜか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は他の動物と違うので、きびしい弱肉強食の世界で生きていくことはできないから。
- イ 人間も動物であるからといって、他の動物の知恵をそのまま取り入れることはできないから。
- ウ 人間も動物であるからといって、他の動物と同じ原理で行動しなければならぬわけではないから。
- エ 人間は他の動物と違うので、生き残るためには自然に手を加えていく必要があるから。

問二——線部2「二種類の混同」とあるが、それはどのような「混同」か。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何が事実なのか、ということと、現実はどうなっているのか、ということが混同されている。
- イ 事実がこうなっている、ということと、自分たちがすべきなのはこういうことだ、ということが混同されている。
- ウ 何が人間的なのか、ということと、何が自然なのか、ということが混同されている。
- エ 自分たちはどうすべきか、ということと、自分はどうしたいのか、ということが混同されている。
- オ 自分たちを含む全体がこうあるべきだ、ということと、自分たちはこうするべきだ、ということが混同されている。
- カ 自分たち以外はこうあるべきだ、ということと、自分たちはこうするべきだ、ということが混同されている。

問三 本文中の A B C に入る適當な語句を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア たとえば イ たぶん ウ まさか エ しかし オ あるいは

問四——線部3「その答」とあるが、それはどのようなものか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間も動物も自然の恵なしには生きられないとする考え。
- イ 新発見に導かれる人間や世界の将来の姿。
- ウ 新しい技術から発生する厄介な問題を解決する糸口。
- エ 人間がよりよく生きていくための方向性。

問五——線部4「私たちはけっこう見たいことを見ることにしているところがある」とあるが、どういうことか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は目の前のすべてをひとしく見ているようでいて、実は自分に都合のよい側面だけを見てしまうということ。
- イ 人間は自分の意見に自信が持てないときに、反対の意見をあえて無視しようとするところがあるということ。
- ウ 人間は見たいと強く念じること、今まで見えなかったものまでが見えてしまうということ。
- エ 人間の目には錯覚というものがあり、事実と反することを事実にしてしまおうとすることがあるということ。

問六——線部5「すこし怒ってもいる」とあるが、なぜか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ふだんは科学技術によって便利で豊かな暮らしをしているのに、人が死にそうな時にだけその技術を用いず、自然界の動物と同じように弱い者が死ぬのは仕方ないと考えているように思われるから。
- イ ふだんは人工的に作り出されたものによって快適に暮らしているのに、人が死にそうな時にだけ、都合よく自然という言葉を利用して命をたちきろうとしているように思われるから。
- ウ 自然は人間に災いをもたらすものとふだんはとらえているのに、早く死んでほしいと思っている人に対してだけ、自然に身をまかせてすみやかに死ぬことが良いことであると述べているように思われるから。
- エ 自然であることが良いことだと主張してふだんは人工的なものを批判しているのに、自分が死にそうな時にだけ、人工的な医療にたよって死からのがれようとしているように思われるから。

問七——線部6「なにか変なことができるようになったりした」とあるが、他の動物と違って特に人間にできるのはどのようなことか。 A の段落の内容をまとめる形で、二五字以上、三〇字以内で書きなさい。

問八——線部7「人間という見つかからないはずだ」とあるが、それはどういうことか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の中にあるものを利用し、その成果をみずから手に入れることで生きている、という意味では、人間も他の動物もおこなってきたことは同じだと考えることができるので、自然の変化に対する責任も同じだと考えるべきである。
- イ 自然に対する働きかけが常に悪い影響を及ぼすわけではない、という意味では、人間の作り出すものも他の動物が作り出すものと同じだと考えることができるので、人工物だからという理由だけでそれを批判することはできない。
- ウ 自然に働きかけ、それを乗り越えることで進化してきた、という意味では、動物も人間もおこなってきたことは同じなので、人間による自然への働きかけが動物による自然への影響より悪いとは一概にいえない。
- エ 自然の中にあるものに働きかけ、そこから得られたもので生きている、という意味では、人間も他の動物と同じく自然の一部と考えることができるので、その人間が及ぼす自然への影響は、自然の変化の一部とみなすこともできる。

